

論文の内容の要旨

論文題目 清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間
氏名 川尻 文彦

本論文は「清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間」と題する。以下、本論文の内容の要旨を記す。

序章では本論文の研究目的、研究方法について述べる。清末思想の研究ではこれまで「洋務・変法・革命」の段階論（小野川秀美）や「西洋の衝撃」に対する「中国の反応」によって描く近代中国像が主流であった。本論文はその両方を採らない。本論文は、西洋文明と東洋文明が交錯する思想空間として清末思想を捉える。「交錯」の語を使ったのは、「西洋対東洋」の二項対立図式を破棄し、一方通行的な「西学」受容史による中国近代思想の叙述を避けるためである。清末思想が古今東西の雑多な思想を含み、「シンクレティック」な、あるいは丸山眞男のいうような「論理的な混乱」に満ちた多元的なものであることを承認する。それゆえ何らかの単一の図式や歴史観によってこれを解明することは難しい。研究方法的には私はD・アーミテイジの「空間」論転回（ラヴジョイ「観念の連鎖」やスキナー「コンテクスト主義」への批判を含意する）やリディア・リウらの「言語横断的实践」に示唆を得ている。また「空間アジア」を提唱し清末中国と明治日本の「思想連鎖」に着目した山室信一の方法に近似するが、山室信一が日本語史料に過度に依拠していることと差別化を図り、中国内在的な理解

(P・コーエン)につとめる。梁啓超をはじめとした中国の知識人たちが触れた明治日本の「東学」は清末思想研究において無視できない要素の一つではある。私は中国の「受動的立場」を前提にした「西学」や「東学」の「受容」や「影響」といった図式を避け、中国の思想家たちが「西学」や「東学」を理解しようとしたその文脈に着目する。その文脈を私は一つの「思想空間」として捉える。その上で私は多言語史料を活用し、「歴史の現場」に即した思想的な分析を加え、「中国を中国として理解する」ことを目指す。そこには発展段階論的叙述や国民国家的思想史を排する狙いもある。

以上のような問題意識を踏まえ、本論文は第一部「東西文明への視角」、第二部「東西の学知の連鎖」、第三部「自由への懐疑と模索」、第四部「共和革命を目指して」の四部構成をとる。

第一部「東西文明への視角」では東西文明を分析する視座を提供した清末におけるいくつかの議論を紹介する。近代中国の知識人たちは東洋文明の立場から西洋文明をどのように捉えようとしたのか。第一章「「中体西用」論と「学戦」——張之洞『勸学篇』の周辺」では、「中学を体とし西学を用とする」としたいわゆる「中体西用」論とはいかなるものであったのかを探る。「中学」を墨守し「洋務」の体制内改革を支えたとされる「中体西用」論の再解釈を試みるとともに、張之洞の『勸学篇』を当時の思想史的な文脈に位置づける。「中体西用」の背後に「学戦」といわれる世界認識があったことを指摘する。第二章「辜鴻銘と「道徳」の課題——東西文明を俯瞰する視座」は清末中国の知識人では珍しく東西両文明に精通した辜鴻銘が東西文明を融合しようとした思想的な試みを分析した。辜鴻銘が提示した「道徳」(moral)に着目し、辜鴻銘思想の総合的理解を目指した。辜鴻銘の日本滞在時期についても史料発掘を試みた。第三章「近代中国における「文明」——明治日本の学術との関連で」では「文明」に関する議論が近代中国においていかなる展開をしたのかを分析する。伝統的な中華思想と西洋「文明」をめぐる議論がどのように衝突し、あるいは交わるのか。単なる「伝統と近代」「文明と野蛮」の対立枠組みでは捉えきれない思想的曲折の分析を目指す。同時に明治日本で流行した「文明史」との関連にも言及する。

第二部「東西の学知の連鎖」では、西洋の諸学知(社会契約論、政治学、哲学)が中国においてどのように理解されたのかを具体的に分析する。西洋の学知は単なる「受容」という枠組みだけで理解することは出来ない。西洋の学知の中国への仲介者としての「東学」にも言及する。第四章「清末中国におけるルソー『社会契約論』」では、ルソー『社会契約論』が清末中国でたどった数奇な運命を検討する。その際、明治日本の『社会契約論』翻訳本が清末中国の知識人の『社会契約論』解釈に大きな影響を与えたことに注目する。また二十世紀初頭

の中国の知識人が『社会契約論』から何を汲み取ったのかを分析する。第五章「梁啓超の政治学——明治日本の国家学とブルンチュリの受容を中心に」は、梁啓超の政治思想に大きな影響を与えたとされながらも、これまで専論的な分析がなされなかった明治日本の国家学（ドイツ国家学）とブルンチュリに対する梁啓超の理解について検討を加える。従来、一九〇三年の訪米以降、梁啓超はブルンチュリの学説を導入することによって「保守化」したとされてきたが、その思想的な背景に対して深い分析が加えられたことはなかった。第六章「梁啓超と徳富蘇峰——馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」と梁啓超の「盗用」をめぐる」は、梁啓超の文章には日本語の「種本」が存在するとの指摘は梁啓超の存命中からしきりになされていたこと、またその種本は福澤諭吉ではなく徳富蘇峰であると「噂されていた」という興味深い事実を紹介する。梁啓超の「東学」の知られざる側面に焦点を当て、彼の「東学」の質を問いかける。第七章「近代中国における「哲学」——蔡元培の「哲学」を中心に」はドイツ倫理学者である蔡元培を通じて近代中国における「哲学」成立史について言及する。「哲学」成立史については研究蓄積が多く、様々な観点から論じられてきた。ただしその際、言及されるのは章炳麟や胡適等の一部の思想家に限られていた。蔡元培が語る「哲学」は従来着目されることが少なかった。蔡元培は胡適の「哲学」的な実践をどのように評価したのか。蔡元培が参照した二〇世紀初頭の日本の「哲学」界の状況にも触れる。

第三部と第四部でそれぞれ自由と共和を取り上げたのは、当時の中国や日本の知識人たちがきまって西洋文明の核心に自由と民主（あるいは共和）を見出したことに由来する。彼らは自由や民主を論じることで、西洋文明を論じたのである。

第三部「自由への懐疑と模索」では、近代中国における「自由」についての思索に分析を加える。多くの中国の知識人は「自由」を西洋近代社会の根幹であると考えていた。第八章「清末の「自由」」は、近代以降の中国の知識人が「自由」をどのように認識したのかを既存の研究を整理しながら論じる。伝統中国では「勝手気儘」というネガティブな意味を付与されていた「自由」を人々はなぜ好ましい価値として受け入れたのか。「自由」についてまとまった見解を残している嚴復や梁啓超の思索をたどり分析を加える。明治日本での「自由」理解が中国にもたらした論点についても言及する。第九章「自由と功利——梁啓超の功利主義理解を導きに」は、清末の「自由」論を分析するの一つの手がかりとして梁啓超の「功利」主義理解を取り上げる。従来清末の「自由」をめぐるのは、嚴復を中心に西洋のリベラリズムとの比較論の観点から論じられることが多かったが、それとは異なる角度からの分析を目指す。梁啓超は「自由」を提唱したが、「自

由」に対して懐疑的でもあった。それはなぜか。その理由の一端を梁啓超の「功利」理解を通じて考察を試みる。

第四部「共和革命を目指して」では、いわゆる「革命」論が興起したとされる時期を分析の対象にする。「革命史観」では捉えることの出来なかった側面に焦点を当て、新たな思想史像を提示する。清末は知識人たちが革命運動のかたわら西洋的なデモクラシーを探求した時期でもあった。第十章「ある「革命」論——留日学生界の動向」では、二十世紀初頭の革命論が目指したものは何かを『革命軍』の著者鄒容と秦力山ら留日学生界の動向を通じて論じる。従来、革命論は孫文中心の武力革命で描かれがちであった。それとは異なる清末「革命」論の別の側面を指摘する。第十一章「宮崎滔天『三十三年の夢』と章士釗『孫逸仙』——孫文と共和主義」は、「革命家孫文」像が宮崎滔天『三十三年の夢』の中国語訳（章士釗『孫逸仙』）の刊行により中国人社会で認知されたことの意味を史実に即して論じる。『三十三年の夢』の中で「共和主義」者として描かれた孫文が国際社会での知名度を獲得し、自らの革命宣伝に乗り出していくことになる。第十二章「近代中国におけるデモクラシーの運命——「民主」と「共和」」では清末中国におけるデモクラシー理解について論じる。清朝の衰退のなかで、デモクラシーを含め西洋の政治体制に対する中国の知識人の理解は進んでいった。新文化運動時期のデモクラシーとサイエンスの標語が知られるが、デモクラシーはもともと中国の知識人にとって理解の難しい概念であった。その理解の過程をたどる。デモクラシーに対する理解の違いが中国の知識人たちの思想的な「分岐」を導いたともいえる。デモクラシーにまつわる「民主」「民権」「共和」などの互いに近接する諸語にも触れる。

終章では本論文の意義を明らかにする。まず「東洋対西洋」の二項対立図式や「西洋の衝撃」論では中国近代思想を描けないことを確認した。西洋中心の「文明史観」や「全面的西洋化」論に再検討を加え、「附会」論が中国の思想界でもった意味に言及した。「全面的西洋化」論が清末民国初の思想界では局地的な現象であったと指摘した。本論文の結論として、清末中国の「思想空間」における複数性の「文明」を指摘した。清末中国の知識人は、古今東西のいずれかの「文明」を「普遍」とすることなく、複数の「文明」の中から自らの思想資源を探っていたのである。